

鈴木「中島一夫氏の書評を駁す」(『新潮』3月号)に対して、中島氏が「再反論」をネットで公開している。それについて、コメントし、また質問する。(2010/2/18)

①中島氏は、『「日本文学」の成立』が明治期に起こった「知のシステムの再編成」を問題にしているということを、よく承知しているかのように語っている。では、それを承知しながら、わたしが近代化主義ストラテジーの誤りの一例として、ついでにふれた——と本文でことわってある——前田愛の「音読から黙読へ」説批判をとりあげて、「批判」を加え、もって『成立』全体の「批判」に替えるような論法をとったのは、なぜか。

②中島氏は、あいかわらず前田愛が何を問題にしようとしたかにこだわっている。明治期の「知の再編成」の問題などより、資本主義経済と出版資本の発展、国家の国民文化形成と教育とが、「コミュニケーションの様式」を変容させたことこそが問題で、鈴木は、それを問題にしていないと言いたいのだろうか。もし、そうなら、中島氏は、『成立』は自分の問題意識に答えていない、だからつまらない本だと言っているに等しい。そうとてよいのだろうか。

③国家の国民文化形成と教育、資本主義経済と出版資本の発展とが、「コミュニケーションの様式」を変容させたことなど、前田愛が取り上げる以前から常識だった。その間の関係について前田愛の出した解答が「音読から黙読へ」というまったく滑稽なシロモノだった。そこで、わたしは、その分析と理論化が、まったくダメだといっているのだ。

中島氏は、前田愛が「黙読」を「沈黙のコミュニケーション」と言い換えただけのことを、印刷物を度外視しても論じられるかのように解釈している。これなども、滑稽の一語につきる。そもそもの問題は、前田愛がヤウスの享受美学に触発されて、文芸享受論を「読者」論などと実体化して導入しようとしたことにある。これについては、そのような方法的誤謬をヤウスの論自体が内在させていることを別のところで批判してきた(HPに公開)。

中島氏に尋ねよう。「黙読」をメジャーにし、「音読」をマイナーに置いた価値観は何に由来するのか。そして、それは資本主義や国民文化形成と、どのようにかかわるのか。前田愛は、それをどう論じているのか。そして、中島氏は、それについて、どう考えているのか。

前田愛は「音読から黙読へ」の変化が、リズムがよく音読、暗誦に適した「文語体」から「言文一致体」へと変えたといっている。これが「発声」のことなど問題にしていないうのだろうか。この水準の議論については、鈴木のことなどはあっているのか、いないのか。

そして、いったい、どこをどう読むと、前田愛が「音読」と「黙読」とがグラデーションになっていると言っているといえるのか。中島氏の引用部で、前田愛は、「音読」「黙読」が入り混じっている状態を言っているにすぎない。江戸時代だって、いまだって、混在している。そんなことはいうまでもないことではないか。

④わたしが、なぜ、「音読から黙読」図式を批判するのかを、もっとはっきりさせておこう。明治期に出版・印刷・流通・通信にわたってコングロマリットを形成した博文館の総合雑誌『太陽』と取りくんだある人の労作が、「音読から黙読に」図式に従った分だけ、誤りに陥った先例が実際にある。博文館と『太陽』という雑誌をめぐる共同研究をまとめた書物のなかで、先行研究を検討する文章の注に、わたしは「音読から黙読に」図式の誤りを指摘したのである。(日文研共同研究報告書『雑誌「太陽」と国民文化の形成』思文閣出版、2000、pp.33-34)。これについては『成立』の中でもふれてある。

⑤前田愛の「音読から黙読へ」が出たとき、実際に首を傾げた人は多かった。わたしは、こんなものが世の中に通用しようとは夢にも思わなかった。後進を過たせるような分析スキームは、もっと、すみやかに解体しておくべきだったと反省し、その亡霊退治に『成立』でも、もう一度、ふれたという次第。

資本主義経済の進展と出版資本の発展、国家の国民文化形成と教育とが、「コミュニケーション様式」を、どのように変容させたか、という問題については、前田愛の図式を批判した上で、地道な努力が重ねられている。だが、現在でもまだまだ未解明な点が多い。わたしも及ばずながら取りくんできたし、引き続き取りくんでいる。

⑥中島氏の再反論の後半を読んで、その姿勢が一貫していることがよくわかった。言いたいことは、こういうことだ。明治期「言文一致」について「俗語革命」ということばを用いて、ベネディクト・アンダーソン流に国民国家形成を問題にする立場から論じたのは、桂秀実であり、それらを鈴木は射程に入れていない。そんなものは自分にとって意味がな

い、と。要するに国民国家形成が問題だ、それを問題にしていない鈴木『成立』など意味がないというのだ。やはり、『成立』は自分の問題意識に込めていないということにつきている。いったい、批評の対象にする書物が、自分の問題意識に込めていない、だからつまらない本だ、などという批評があるのだろうか。批評のイロハから考えなおしてほしい。

⑦その上で、中島氏に込めておこう。中島氏だけではないが、まだ、ベネディクト・アンダーソン流の考えを信奉している人がいる。『想像の共同体』の、これまでの国民国家論に対する特徴は、国語(national language)の普及について、国語教育ではなく、活字メディアの役割を東南アジアというフィールドで論じたところにある。その基準は、ヨーロッパの国民国家形成、とりわけ分裂していたドイツ語圏をひとつのものと意識させるのにはたしたゲーテンベルク革命の役割である。これをヨーロッパ・モデルという。ヨーロッパにも複合国家はあり、一国家一言語とは限らないが。

逆に、日本は一国複言語のまま国民国家として進展した。おおざっぱに言えば、中国では一国一標準語(書きことば)と方言や少数民族語(話しことば)の状態が長く続いている。逆に、同じような状態にあるアラブ語圏はいくつもの国家に分かれている。一国一言語は一定の地域に限るので、ベネディクト・アンダーソン流の考えに普遍性はない。

1、日本においては、江戸時代から民衆の言語(通俗言語=俗語にあたる日本語。B.アンダーソンがラテン語を「神聖な言語」というのは神聖ローマ帝国の共通語だったから。漢文も江戸時代の日本語にとっては聖典の言葉)が版本によって広く多彩に流通していた。19世紀の民衆のリテラシーの高さはヨーロッパ諸国のそれに比べて高いことは、外国の専門家も認めている。にもかかわらず、黒船が来るまで、国民国家形成に向かわなかった。「俗語」が印刷物を通して広く流通しても、国民国家形成には向かわないということを、日本の例は示している。国民国家形成と民衆の言語の印刷物の普及とは、必ずしも並行しないのだ。そして、ヨーロッパ諸国の「俗語革命」と明治日本における「言文一致」(言語の問題でなく、文体、それも文末統一)とは、まったく別の問題なのだということが『成立』では、明らかにしたのだ。

2、日本の場合、国民国家形成にもっとも大きな役割を果たしたメディアは、幕府と藩のお触書に代わった官報と御用新聞である。だから、概念の再編の分析についても、その

用例を分析してある。ただし、これに関する研究は、まだ組織的に行われていない。データ・ベース化して、中国、韓国のそれと付き合わせることを模索している段階である。

3、そして、1872(明治5)年の学制によって、エリート育成のための機関とされた中学では、「漢文」が国語の一部に編入された。これは「読み下し」体ではなく、日本人の書いたものをふくめて、「白文」の読み書きを必須の課題にしていた(江戸時代の知識層は「白文」の読み書きができた。明治期も20世紀はじめまでは)。そして、さらに知識層には、英語か、ヨーロッパのどれかが求められた。だから、明治期からの知識層はリテラシーにおけるトリリンガルなのだ。そのことを外して、近代日本文化は論じられない。わたしは、それを強調してきた。要するに、このような実態のところに、一国一言語モデルをアテハメ、「下からの国民国家意識の形成」を問題にしたところで、的はずれな議論にしなければならないということだ。

4、日本の明治期の場合、下からのナショナリズムとは、自由民権運動である。しかし、これは言語政策に統一的な論陣を張ったわけではない。言論としては、種々の欧化主義の言語政策に対して、政教社、とりわけ三宅雪嶺の漢語、漢字擁護論が勝ったかたちになっている。『成立』でも、そう論じてある。もちろん、これは日本語内部の問題。

5、そして、その後、1890年代後半から、「民間からの国民文化形成」に大きな役割を果たしてゆくのが、博文館であり、それゆえ、その『太陽』の研究と取り組んだといういきさつである。

6、ついでにいうと、これは「植民地」の問題にもかかわる。台湾、朝鮮の「文治政策」期、「満洲国」の言語政策とその変化、それらの現実をつかもうとしない議論がいかに多いことか。帝国主義の問題は、そして大衆社会の問題は、国民国家や国民文化形成とはまったく異なる。国民国家が、みな帝国主義へ進んだわけではない。いうまでもないことだが、リースマンも前田愛も、これをあいまいにしている。歴史性の問題である。

⑧こうして、B.アンダーソンが提起した問題が射程に入っていないどころか、そのやり方は日本には通用しない、ということをわたしは何度も明らかにしてきている(最近では

集英社新書『自由の壁』p.153)。

『成立』では、課題がちがうから、正面からとりあげていないが、読める人が読めば、ああ、これは、B.アンダーソン批判だと、わかるはずだ。中島氏は自分の信奉する B.アンダーソンの考えが日本では通用しないという事例があちこちで書いてあるので、それとわからないままに闇雲な反撥を感じたのだろう。

闇雲というのは、たとえば、注にはつきり書いてあることを、まるで、わたしが隠したかのように言いたてることをふくめてだ。本文でなく、注に書くことが隠すことになること考えること自体がおかしい。事典の項目執筆には、いろいろな事情がついてまわる。もちろん、責任は執筆者にある。が、わたしが問題にしているのは、個人名をあげて、どうこういうような水準のことではない。すでに一般化し、国際的にも定着している認識をとりあげ、それが「妄説」であることを明らかにする際にとった措置だ。

『成立』以前に、わたしの論文(『『言文一致と写生』再論—『た』の性格、『国語と国文学』、2005/6)を読み、山本正秀の各種の論文を読み直して、彼の議論が混乱していると感じた人は何人もいる。言語学、国語学からも、そろそろ反応が出てくるはずだ。

なお、わたしは、桂秀実の俗語革命論は読んでいない。だから、中島氏の紹介が正しいかどうか判断できないが、中島氏のいうとおりになら、B.アンダーソン流の枠内であり、それゆえ、検討に値しないことになる。桂秀実が、どのように扱おうが、根本のところでは依拠した「言文一致」論は広く流布しているものにちがいない。中島氏の引用でも、ヨーロッパの「俗語革命」と日本の明治期「言文一致」を同列に置いている。そういう議論が、そもそも「言文一致神話」に依拠したものであり、妄説だと、わたしは言っている。そのわたしの議論はあたっているのか、いないのか。意見を聞きたい。

⑨これこれ、このようにして国民国家ができましたと、わかりきった結論に向けて、自分に都合のいいフィールドや材料を集めて、「実証」、「論証」するのは研究とはいえない。そういう論文や批評が続いて出ていたときがある。中島氏がまだ、そんな季節風の中に漂っているのなら、速やかに抜け出るべきだ。

今日も日々、国民国家は組織されている。たくさんの亀裂を押しつぶしながら。その亀裂と押しつぶし方に、目をこらすには、誤った分析スキームを解体再編しなくてはならない。だからこそ、「文学」という概念から対象化しようとして取り組んだのが『概念』であ

り、「日本文化」なるものの根幹として働いてきた「日本文学」という概念を対象にして論じたのが、今度の『成立』なのだ。

それゆえ、わたしは明治期人文学の復活など唱えているわけではない。逆転とはっきりいっている。たとえば「日本文学」古典の宗教性をそれとして問題にしている研究はすでにたくさん出ている。これは別の人の書評に対して。念のため。

⑨中島氏には、もう一度、そういう目で『成立』を読み直してみしてほしい。そうすれば、B.アンダーソン流の枠組みにとらわれていた頭が切り替わるはずだ。そして、これまでの「言文一致」論に対するわたしの批判は、納得がいくのか、いかないのか、それについて自分の態度を示すべきだ。また中村光夫、江藤淳、柄谷行人らの「妄説」に対するわたしの批判についても、意見を聞かせてほしい。少なくとも、鈴木は「二義的」なことを問題にしているにすぎないと言ったあとで「同様に」と言った、その「同様」の中身を明らかにするくらいはしたらどうだろう。